

令和3年度 「スラブ・ユーラシア地域（旧ソ連・東欧）を中心とした総合的研究」に関わる  
「共同研究班」 研究報告書

令和4年4月1日現在

研究課題名	スラブ・ユーラシア地域におけるメディア文化史の共同研究		
担当者	氏名	所属機関・職	
	安達 大輔	スラブ・ユーラシア研究センター・准教授	
班員	氏名	所属機関・職	専門とする研究分野
	大武 由紀子	北海道大学文研究 院・専門研究員	ロシア・アヴァンギャルド芸術
	研究テーマ		
	1920年代～1930年代のソ連美術史		

## 研究成果の概要

・研究課題「スラブ・ユーラシア地域におけるメディア文化史の共同研究」のもとに安達大輔（准教授）班の研究テーマである「スラブ・ユーラシア地域における文化の大衆化と規範形成の関係」を前提にして、1920年代から1930年代の造形芸術（絵画）分野における政府（党）—芸術家—大衆の関係を、画家であると同時に演劇人として身体表現を重視した芸術家ソロモン・ニクリーチンの研究を安達准教授のテーマ領域の1部分をなす“身体性”を1つのキーワードに次のように研究を進めた。

・日本はもとよりロシアにおいても著名とはいえないキエフ出身のユダヤ人アヴァンギャルド芸術家・演劇人ソロモン・ニクリーチン（1897-1964）を、これまでの研究テーマであった構成主義アヴァンギャルド・フォトモンタージュ・ポスター画家グスタフ・クルーツィス（1895-1938）に対置させる新たなテーマとして取り上げた。共同研究員としての1年間をニクリーチン研究の屋台骨作りと位置付けた上で、そのステップとしてロシア文学会北海道支部会及び全国大会での発表（7月、10月）そしてその成果を投稿論文として総括した（1月）。

・7月の支部会発表においては、ニクリーチンの創作基盤となった理論「プロエクツィオニズム」と理論に並行した身体による表現“ビオメハニカ”（身体運動による思想表現）を視野に入れて、絵画様式「多重リアリズム」を解明し、それに基づく作品「古きものと新しきもの」（1935年）の分析を安達准教授のアドバイスを参考にしてその分析を試みた。

## 研究成果の概要（続き）

・1932年4月に社会主義リアリズムが定立され、6月には造形芸術家の全ての団体が解体の後、個々の芸術家は唯一の団体である「ロシア芸術家連盟」に統合された。その最大の支部として「モスクワ地区芸術家連盟（モスフ：MOCCX）」が設立され、ここが社会主義リアリズム芸術の司令塔になって

いる。ニクリーチンによる手法「多重リアリズム」(絵画モンタージュ)は、フォルマリズム(形式主義)であるとして激しく批判された後、ニクリーチンは「モスフ」が管轄する「芸術家の家」に召喚の上で自己批判を前提とする報告討論会が企画された。そこにはフォトモンタージュ・ポスター画家クルーツィスを筆頭にモンタージュを主要な手法とする画家11人が招聘され、ニクリーチンの報告を基にした討論会が開かれた。その内容はタイプ速記録 РГАЛИ(Российский государственный архив литературы и искусства), ф. 2717, оп. 1, ед. 105, лл. 22-27.として残されている。

ロシア文学会本部大会での発表(10月30日)においては、本討論会のほぼ1年後の1934年に制作された、作品「人民の裁判」を、討論速記録の内容に並行して作品分析を試みた。

・以上の2回の研究発表の内容を投稿論文「アヴァンギャルド芸術家C. ニクリーチンとその理論プロエクツィオニズムー1930年代社会主義リアリズム様式としての多重リアリズムー」としてまとめた(1月31日)



「古きものと新しきもの」(1935年)



「人民の裁判」(1934年)

主な発表論文等(雑誌論文、学会発表、図書等) ※謝辞の有無について明記願います。

- ・ロシア文学会北海道支部研究発表会(2021年7月10日)  
研究発表「アヴァンギャルド二世代の画家ーソロモン・ニクリーチン(1897年-1964年)ー社会主義リアリズムと多重リアリズムー」
- ・ロシア文学会全国大会発表(2021年10月30日)「C. ニクリーチンとプロエクツィオニズムー社会主義リアリズムとしての多重リアリズム」
- ・ロシア文学会投稿「C. ニクリーチンとプロエクツィオニズムー社会主義リアリズムとしての多重リアリズム」(4月結果発表)

当該研究活動をもとに採択された研究プロジェクト(応募中の研究プロジェクトを含む)  
なし

※枠を調整することは構いませんが、ページは追加しないでください。